『週刊ポスト』2020.12.7(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第140回 歌手たちの人生を変えた山口洋子の改名パワー

コロナ禍の折、外出もままならない状況下、BSテレ東で毎週放送される映画『男はつらいよ』を楽しみにしている友人がいます。映画の序盤、NHKラジオ『ひるのいこい』風の前奏から始まる主題歌が流れると、条件反射的にすさんだ気持ちが癒されるからだといいます。歌の冒頭で、渥美清が仁義を切る自己紹介はおそらく日本一知られた口上でしょうが、007のボンドさん同様、芸名以上に役名が認知されてしまうことになりました。

歌手にとっても、新たな人生へと導く可能性を秘めた芸名には深い愛着があるはずですが、七転び八起き、再出発をめざすための改名は、昭和歌謡の世界では枚挙に暇がありません。菊地正夫→城卓矢、大形久仁子→内田あかり、中島淳子→夏木マリ、目方誠→美樹克彦、山岡英二→吉幾三、伊達春樹→山本譲二、星美里→夏川りみなどへの改名は、歌手人生に大きな転換をもたらすものでした。

かつて大阪で万国博覧会が開催された昭和45年1月から日本テレビ系で放送が始まった『全日本歌謡選手権』という視聴者参加型のオーディション番組がありました。

実力を備えながらも芽の出ない無名のプロ歌手も続々登場、10週連続勝ち抜くと、レコード会社との契約権利を獲得し、再デビューが可能となるのですが、再デビューの際に「改名」という注文をつける審査員がいました。当時33歳にして銀座の高級クラブ『姫』のママとして名を馳せていた山口洋子です。

三谷謙という歌手には、『姫』の客でもあった五木寛之にあやかりつつ、「いいツキをひろえるように」との思いをこめた「五木ひろし」の芸名を授け、渥美健には「中条きよし」、元オックスの野口ヒデトには「真木ひでと」への改名を命じます。ビッグネームの一部を拝借した名は、どれも苗字を漢字2文字、名前を平仮名3文字で統一、山口洋子と同様、総画数を20画以下に抑えています。

新人ホステスに店での源氏名を与える要領にも似た改名、そこにはすでに10年余に及ぶ高級クラブのママとしての経験と直感による自信があったのかもしれません。『姫』のホステスから高級クラブ経営者への道を歩み始め、芸能人との浮名をいくつも流した田村順子は、山口の眼力と面倒見のよさに敬服していました。総画数18が示す「野心にあふれ、意志が強い」という山口洋子の名にこだわりを持ち続けつつ、道を開くには名前の力を借りた「運」の必要性を感じていたのでしょう。

すでに神楽坂浮子に提供した『銀座化粧』で作詞家デビューを飾っていた山口でしたが、名を揚げたのは、『全日本歌謡選手権』の放送がスタートした昭和45年にヒットした『噂の女』(クール・ファイブ)、『一度だけなら』(野村真樹)、そして翌年、秘蔵っ子・五木に提供した『よこはま・たそがれ』以後になります。

少女たちがジャズ喫茶で嬌声をあげていたGSの時代から、銀座のクラブで歌詞が醸成される「大人の歌謡曲」へと時代は移行していました。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『しあわせになろうね　私的「昭和大衆歌謡考」第4集』(グスコー出版)が好評発売中